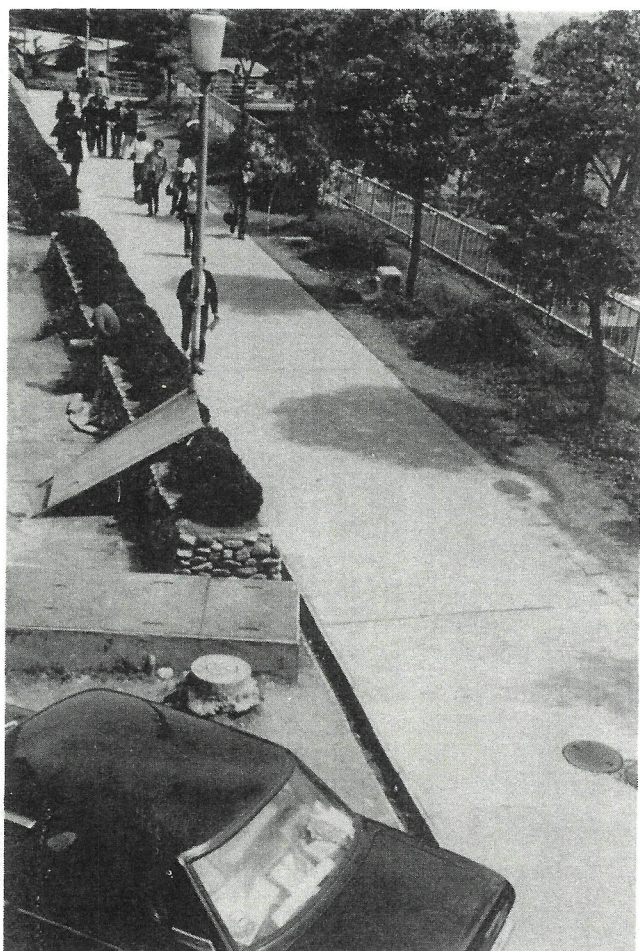


神戸大学教養部

広報

もくじ

目下「お話し中」	小島輝正・表紙裏
学長、教養部について大いに語る	1～10
「教養」ということ	伊藤正文……11
入学式風景	……12～13
教養部教官の研究テーマ	……14～17
専門バカと総合バカ	森 晴秀……18
総合コース	……20
車中のふたり	……21
教官・学生グループ紹介	加納・金沢・小西・渡辺 22
今年のG	……26
二課程から：教養部人事異動	……27
図書館から	……28～29
公開質問状について	……30～31
教養部教官記念写真	……32



昭和50年5月23日

NO.45

教養部広報委員会

専門/バカと総合バカ

—総合コースの紹介にかえて—

森 晴 秀
(総合コース委員)

「蛙の眼球の電動作用に対する紫外光線の影響」という細かい研究が博士論文のテーマになりうることを揶揄したのは、他ならぬ漱石であった。大きさにいえば、すでに70年の昔、『吾輩は猫である』（明治38年—39年）の中で、早くも兆しのあった自然科学分野の専門化、細分化を皮肉ったこの作家の精神構造と、1975年の教養部における総合コースの理念との間には、ある種の関係を認めることが可能なのでは。つまり、学問といえば、たとえ限られた専門分野の中で、更に細分化した対称を究めるときですら、先ず広い基本から始めて広い基本を同時に研究し、広い視野の中に特殊研究を位置づけるのが常道である。しかし、研究方法が発達し、その対象が狭められるにつれて、同じ領域の研究者であっても、対称が少し異なるだけで自分の分野以外のことはしだいに分らなくなってくる。動物全体の研究が脊椎動物研究となり、両棲類研究、更には無尾目の研究、それが蛙の研究というふうに細かくなってゆく段階ぐらまでは恐らくはまだ問題

は起らないであろう。それが眼球の神経の研究をやる頃には、多分全人格的(?)な蛙の存在は忘れ去り、たとえばカジカが東灘区の住吉川に棲息しなくなった理由が分らなくなっている。いや分っている、そんな呑気なことに関わりあっては、自分の専門領域の進歩に追いつかぬ。現在の多くの研究者には、よそ見をする時間的な余裕がなくなっている。重箱の隅をつつくことに汲々としなくては先人以上の業績があがらなくなっている。学問研究の目的が人間の幸福の追究であることを忘れるところから、いわゆる人間不在の専門研究、専門家のエゴイズム、好意的ないい方をすれば専門バカ、etc., etc. という現象が現われてくる。病氣は直ったが患者は死んでいた、というアレだ。

漱石がこのような事態を予見していたか否かは知らぬ。しかし、大気汚染に気づいた時にはすでに遅く、六甲山のイチモンジセセリが減り、オハグロトンボが居なくなり、ましてや研究者自身が慢性の気管支炎や重症の分裂症にか

かっており、もはや人間としても使いものにならなくなっている。

人文科学の領域でも、例えばほんの20年も前であれば、ただ漫然とシェイクスピアを味読しておればそれで事が済んだのに、現今では(実情はそうともいえぬが…)一応細かいことまで研究しつくされて、特定の作品に現われた特定のことは特定の文脈における特定の意味や用法の研究ということで、結構修士の学位程度なら取れるようだ。そしてこの修士ならぬ修士サマが、英文学史はおろか、自分の専攻分野であるシェイクスピアの作品全体という、極めて限られた領域ですら、十分に消化しているという保証は全くない。

現在は欧米諸国でも学際領域の研究が盛んである。ある分野と他の分野とが、本筋あるいは末端で交わる領域——(marginal area)の研究である。例えば大気汚染や空港問題の解決には、化学、物理学、気象学、地理学、生理学、医学全般、政治、経済、ひいては地域的・階層的エゴイズムの分析等々といった大きな

視野が必要である。こういう多面的なアプローチを学際的研究(interdisciplinary approach)と称するのであるが、このような新しい方法は、上にも述べたように、過去への反省や現状打開の必要上、一専門領域(disciplined area)では解決し切れず、止むなく他の領域に協力を求めることに端を発したものと見える。人文科学の分野ですら、統計学、記号論理学、言語学、その他に関するかなり高級な知識が要求されるのが現状である。

現在の教養部にはすでに各種の専攻分野があって、その課程を通過することにより、学生は自己の内部において自然に広い視野から対称を総合的且つ批判的に把握することを期待されている。その意味では、教養部全体がひとつの巨大な総合コースであって、現在及び将来におけるその任務は非常に重いといわねばならない。しかし学生がある特定の分野と、他の分野との関連を学習の過程で自から正確につかむことは必ずしも容易ではない。また教官の方でも他の分野との関わりを常に意識して授業を行っているとも限らない。われわれが、わざわざ「総合コース」という特別な科目を設置したのは、学生も研究者も共に上に触れたような観点から、学問的視野を拡大し、個別研究をも更に深めるための刺激剤としての機能を、このコースに求めたからである。

神戸大学教養部においてはすでに昭和38年度に、他大学

に先がけて総合コースの実験的な試みを行い、その後数年の研究期間において、昭和47年度からは、講師陣には他学部や他大学からも協力を求め(中1名はフルブライト交換教授)、「ルネッサンスと現代」、「近代思想とその限界」、「度量衡と社会」、「六甲山地」、「アメリカ研究—文学と社会」等のコースを順次開講した。その後若干の再編成を経て現在に到っている。

47年度に筆者が行ったアンケートによれば、総合コースは複数の教官が担当するため各講師の講義内容に一貫性がないのがつまらなかったという意見と、一貫性がないためにかえっていろんな立場から考える機会をもつことが出来て有意義であったという正反対の意見が、それぞれほぼ同数あった。これは受講者の高い関心を示す資料のひとつと理解してよいが、その後も学生諸君やコース担当者の反応によれば、このコースが学生を含めた関係者一同の思考過程に、新しい刺激を与えると、新しい目標は達成しつつあるものと考えてよい。

しかし実際上の問題も少なからずある。例えば、担当者は各自の専門分野の授業に加えて少くとも一学期に2~3回は特別に講義をしなければならぬ観点から、学問的視野を拡大し、個別研究をも更に深めるための刺激剤としての機能を、このコースに求めたからである。

望者全員が受講可能ともいえない。それを可能にするためには、他の時間帯においても開講することが必要となり、そうすれば直ちに他の科目との調整が問題となる。そのことはひいては必須単位数の再検討すらも問題として取りあげざるを得なくなり、一方で大学設置基準に定められた単位数も考慮せざるを得ず、その意味で今後に残された問題は多いといわねばならない。講義のテーマそのもの、講義形式の問題等も当然その中に含まれている。

さて筆者は最近、アメリカの大学で総合科目を開講し、あるいは総合学部を設置している15ばかりの所を訪ね、担当者たちと意見の交換をする機会を得たが、そのひとつ、アメリカ研究で著名なペンシルベニア大で、「総合バカ」という耳なれぬことばを覚えた。いわゆる何でも屋のもの知らずという意味である。隣家に泥棒に入ろうと思って境界の生垣のあたりを物色している中に、別の泥棒にわが家をごっそりしてやられるかも知れぬ、自分の本分を忘れ、最新流行に浮身をやつした軽薄な輩、バスに乗り遅れることのないチャッカリ屋、などの意味も読みとれよう。

比較文化論、比較言語学、比較人類学、等々の方法に基づいた本が最近よく出るようだ。確かに他との比較において、比較されるものの本質を解明する手がかりは得られよう。広い視野の中でこそ個と全体との関係が究められよう。

しかし個はあくまでも個であって全体ではない。個から始まって全体に及び、再び個に戻る、基礎から応用へと発展しつつも、常に基礎は視野の中になければならぬ。これが学問であり、人間社会でありスポーツであり、人間の尊厳でもある。

海外のいくつかの大学においては、ある研究テーマが発見されるたびに各学部の壁を越えて、関心をもつ研究者が集まり、学生を加えたゼミナールを組織する。予算的裏づけが与えられて正式の研究・教育機関として認められ、卒業生をそこから送ることが、制度的に保証されていて、特定の共同研究が終われば、協力者は自分の元の古巣である教室に戻ることが可能なので

ある。「専門バカ」が「総合バカ」にならぬ中に、あるいはなくなってしまったのちですら再び「専門バカ」に戻る自由が与えられている。しかし彼はずでに元の専門バカではなくなっている筈だ。もっとも日本文化が時折「タコツボ文化」にたとえられることでも

明らかのように、日本人はめいめいが自分のツボに閉じこもりがちであって、めったなことでは隣りのツボの住人とは手をつながぬ国民であり、そのために共同研究が必ずしも円滑に行われるとは限らぬ。しかしこのような離合集散を制度的にも保証出来る教育・研究機関が大学の一隅——あるいは全体として——確立することがもしも可能になれば、日本の学問研究の閉鎖性

も、少くとも技術的には除去することが可能になる。漱石大先生のカエル氏もこれには反対はするまい。むしろ嬉んで眼球の神経を提供してくれるであろう。

いずれにしても、制度的な保証と同時に、志を同じくするものの協力を必要とする。

その点では上述のように、すでに教養部以外の方々からも過去3年にわたって惜しみない援助を得ることが出来たのは幸せであった。また学内の協力態勢を更に一步進めたいという願いもあって、須田新学長ご自身に総合コースへの参加を求めたところ、ご快諾を得た。学長の参加によって今年度後期あたりからは装いを一新したコースが生れることを期待したい。

総合コース実施状況

開 講 期	科 目 名	講 義 題 目
47年度前後期	人文総合	ルネッサンス
〃 後期・48年度前期	〃	近代思想の成果とその限界
〃 後期	社会総合	現代社会とデモクラシー
〃 前期	総 合	度量衡と社会
〃 前後期	〃	六甲山地
48年度前期	人文総合	ルネッサンス I
〃 後期	〃	〃 II
〃 後期	〃	ヨーロッパ近代思想をめぐる現代的課題
〃 後期	社会総合	現代社会とデモクラシー
〃 前期	総 合	度量衡と社会
〃 前後期	〃	六甲山地
49年度前期	人文総合	ルネッサンス I
〃 後期	〃	〃 II
〃 後期	社会総合	現代社会とデモクラシー
〃 前期	〃	アメリカ研究—文学と社会
〃 前後期	総 合	六甲山地
50年度前期		英詩研究
〃 後期		未定（人間—というテーマで学長も参加の予定）